

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.147

2005年8月

国連大学／ユネスコ国際会議を開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

目次

●ニュース	
国連大学／ユネスコ国際会議を開催	2
徐元宇博士に名誉博士号を授与	4
地域の国際交流ボランティア5団体に感謝状を贈呈	5
赤崎特別教授がストックホルムで講演	6
(財)武田科学振興財団研究奨励金の贈呈式が行われる	7
近藤文部科学審議官が本学を視察	7
国立大学法人評価委員が本学を訪問	8
建物のユーザー満足度調査に伴う現地立ち入り調査を実施	8
AED（自動体外式除細動器）を設置	9
文部科学省記者クラブにおいて記者発表を行う	9
●知の先端	
イネの収量を決定する重要遺伝子を同定	10
芦苺 基行（生物機能開発利用研究センター助教授）	
松岡 信（生物機能開発利用研究センター教授）	
高分子の構造制御と機能	12
岡本 佳男（エコトピア科学研究所客員教授／名誉教授）	
●教育のデザインとプラクティス	
法科大学院における新しい教育の試みー ICT を用いた実務技能教育の創造ー	14
菅原 郁夫（大学院法学研究科教授）	
●地域にひらく	
都市・地域と連携し共存するキャンパスに向けて	16
小松 尚（大学院環境学研究科助教授）	
●オフタイム	
不自由人 伊藤 義人（附属図書館長）	18
●学生の元気	
映画制作の面白さを教えてくれたショートフィルム	19
服部 達哉（大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻博士課程後期課程3年）	20
第54回東海地区国立大学体育大会	21
第59回大阪大学・名古屋大学対抗競技大会	
●部局ニュース	22
工学部懇話会を開催	22
公開シンポジウム「国際報道はいま」開催	23
先端技術公開セミナー開催	23
エコトピア科学研究所が慶南大学校産学協力団と学術交流協定を締結	23
エコトピア科学研究所が INAX と連携実施協定を締結	24
附属図書館が企画展「説話（はなし）の書物」を開催	25
物質合成研究拠点機関連携事業発足式を開催	26
情報連携基盤センターが外部評価を実施	26
セミナー「国立大学法人化の下での高等教育の将来像」を開催	27
シンポジウム「アジアの環境法ー法の整備から執行・遵守の確保へ」を開催	27
「大学から社会への情報発信」研究会を開催	28
博物館第41回特別講演会開催	28
●新任部局長等の紹介	29
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成17年6月16日～7月15日	
●INFORMATION	32
卒業生向け広報誌「名古屋大学2005」を刊行	32
名古屋大学教育紹介用 DVD を作成	33
●イベントカレンダー	
●ちょっと名大史	36
青色発光ダイオードと豊田講堂時計台	

国連大学／ユネスコ国際会議を開催





国連「持続可能な開発のための教育の10年」アジア太平洋地域開始式典及び国連大学／ユネスコ国際会議「グローバル化と持続可能な開発のための教育－地球と未来を支える教育－」が、6月28日（火）、29日（水）の2日間、豊田講堂等本学施設において開催されました。

この会議は、国連大学とユネスコから、本学に対して共催の申し出があり実現したもので、本学側からは、大学院国際開発研究科を中心とした教員、学生が参加しました。

28日の開始式典では、松浦晃一郎ユネスコ事務局長、小島敏男文部科学副大臣、ロブ・フェンウィック DESD ニュージーランド議長らがあいさつし、シェルドン・シェーファー ユネスコバンコク事務所長から、アジア太平洋地域における「持続可能な開発のための教育の10年」の開始であると宣言がありました。

続いて行われた公開シンポジウムでは、松浦ユネスコ事務局長、ハンス・ファン・ヒンケル国連大学学長、西村六善外務省地球環境問題担当大使、炭谷茂環境省事務次官及び平野総長のあいさつの後、毛利衛日本科学未来館館長、リディア・アーサー・

ブリト元モザンビーク高等教育・科学技術大臣、エミル・サリム インドネシア大学教授らによる基調講演、有馬朗元文部大臣、中西国際開発研究科長らによるパネルディスカッションが行われました。会議には、佐藤禎一ユネスコ日本政府代表部特命全権大使、井上正幸文部科学省国際統括官をはじめ、本学及び近郊大学の教職員や学生など約700名が参加し、持続可能な未来に向け、人類と環境、経済と文化、地域と世界という様々な視点から、活発な議論を行いました。

翌29日のワークショップでは、「E-ラーニングと持続可能な開発」、「地域のイニシアティブ」、「高等教育の役割」の3つの分科会に分かれ、昨日の

全体会議での基調講演やパネルディスカッションを踏まえて、議論を重ねた上で、持続可能な開発のための教育を実践するための取り組み方について総括を行いました。全体会合では、各分科会の報告の後、持続可能な開発のための教育を推進するための地域の拠点として、仙台広域圏、岡山市周辺地域、トロント市など国内外の7つの地域に対して国連大学から拠点の認定書が交付されました。最後に、ヒンケル国連大学学長から、「持続可能な開発のための教育の10年」の具体的な成果として、今後世界的に地域の拠点が益々増えるよう期待したいとの抱負が述べられました。

2	3	4
5	6	7

1	8
---	---

- 1 会場の様子
- 2 あいさつする小島文部科学副大臣
- 3 あいさつする松浦ユネスコ事務局長
- 4 あいさつするヒンケル国連大学学長
- 5 あいさつする平野総長
- 6 パネリストとして参加する有馬元文部大臣
- 7 講演する毛利日本科学未来館館長
- 8 平野総長と佐藤ユネスコ大使



徐元宇博士に名誉博士号を授与



平野総長から名誉博士号を授与される徐元宇博士

徐元宇博士（ソウル大学校名誉教授）に対する名誉博士号（第13号）の授与式が、7月15日（金）、法政国際教育協力研究センター棟CALEフォーラムにおいて、本学から、平野総長、森、若尾、杉浦の各副総長、佐分法學研究科長、杉浦法政国際教育協力研究センター長、ソウル大学校法科大学から、成樂寅学長、林正勳、李元雨の両副学長らが出席のもと行われました。

徐博士は、韓国公法学会会長、環境法学会会長の要職を歴任するなど韓国行政法学の第一人者であり、1995年室井力名誉教授らと第1回東アジア行政法学会（於：名古屋大学）の開催に尽力し、日本のみならずアジア諸国の法学研究者との学術交流において主導的な役割を果たされました。また、1997年7月から1998年3月まで大学院国際開発研究科客員研究員として来日し、同研究科及び法学研究科のスタッフとアジア法に関する共同研究を精力的に行うなど、両大学の「架け橋」としての役割を果たしてこられま

した。

日本と韓国は、グローバル化の中で、法学分野でも多くの共通の課題を抱えており、両国の大学が共同して法学をめぐる新しい課題に取り組み、解決の方向性を探究することが求められています。また、本学が日本の大学では先進的に取り組んできたアジア法整備支援に対し、ソウル大学校法科大学も昨年以降本格的に取り組むことになり、両大学の一層本格的な学術交流を開始することが可能となりました。こうした中で、21世紀のアジアの法と社会の在り方を展望するとき、両国の大学、研究者が強い連携を持ち、アジアの新しい課題に取り組むことが求められており、同博士の「架け橋」としての一層の活躍が期待されます。



徐元宇博士を囲んでの記念撮影

地域の国際交流ボランティア5団体に感謝状を贈呈



贈呈式終了後の記念撮影

本学の留学生に、10年～20年以上恒常的に献身的な支援活動を続けていただいている国際交流ボランティア5団体に対し、感謝状が贈呈されました。

贈呈式は、7月7日（木）、本部第2会議室において、平野総長、山下、山本、豊田の各理事、江崎留学生センター長、松浦留学生相談室長及び関係幹部事務職員の列席のもと行われ、平野総長から各団体の代表者にそれぞれ感謝状

と記念品が手渡され、さらに、各団体の長年にわたる本学留学生への支援に対し、感謝の意が述べられました。

その後の懇談では、大学側から、本学における留学生の現状や課題等が説明され、また、各団体からは、支援内容や留学生との交流の様子等の報告とともに、本学の留学生支援に対する要望が述べられるなど、大変有意義な場となりました。

団体名	本学留学生とその家族への支援内容
国際交流ともだち	名古屋大学留学生会館を活動場所として、新規入居者への生活用品の提供、不用品リサイクル、引っ越しの手伝い、宿舎探し、年2回のバザーの実施等。
ALOE (Association of Ladies with Overseas Experiences)	春休みと夏休みに日本語教室を開催。新入生歓迎行事（春、秋年2回）、七夕パーティ、イヤーエンドパーティ、年2回のバザーの実施等。
名古屋YWCA 国際交流会	本学に新規渡日した留学生（毎年約150名）を、それぞれの宿舎に迎えに行き、区役所に同行して、外国人登録と国民健康保険加入手続きの手助けを実施。交通機関の利用の仕方等の説明や年2回のバザーの実施等。
名古屋大学公開講座友の会	18年前に設立後、毎年、本学留学生20名を熱田神楽に招待するとともに、年2回のバザーを実施。
名古屋栄ライオンズクラブ	「名古屋大学留学生家族のための日本語・日本事情講座への支援」として、受講テキストの無償配布と講師謝金の一部援助。1994年後期講座から、延べ1,109名の受講生がテキストを受領。

赤崎特別教授がストックホルムで講演



講演する赤崎特別教授

独立行政法人日本学術振興会（JSPS）主催のサイエンスフォーラムが、6月17日（金）、ストックホルムのスウェーデン王立科学アカデミー・バイエルホールで開催され、赤崎特別教授が講演を行いました。

このフォーラムは、JSPS スtockホルム研究連絡センターが、日本のトップレベルの研究を現地に周知するとともに、現地の先進的な研究動向を探る目的で開催しているもので、本年度で5回目の開催となります。

今年は、スウェーデンの研究界における強みの一つが「実用に結びつく研究」であることに着目し、我が国の第2次科学技術基本計画において重点4分野の一つとなっている「材料科学」の分野に焦点を当ててフォーラムが開催されました。

「材料科学の最前線」をテーマとして開催された今回のフォーラムには、赤崎特別教授のほか日本から1名、スウェーデンから3名、現在もこの分野で研究活動をしている著名な研究者が招かれ、講演を行いました。

赤崎特別教授は、「青色発光デバイスと窒化物半導体」と題して、高品質な窒化物の単結晶を作り出すに至る研究の積み重ねを含むこれまでの研究実績を紹介するとともに、今後の研究についての展望を含めて、精力的に講演を行いました。講演後には、出席した研究者等との間で活発な質疑応答が交わされ、赤崎特別教授は身振り手振りを加えつつ、丁寧に回答していました。

このフォーラムの会場となったスウェーデン王立科学アカデミーは、スウェーデンの学術界において最も伝統と権威のある機関であり、同フォーラムの協力機関として今回初めてこの会場が提供され、格式ある会場の雰囲気各講演の充実した内容に花を添え、大変意義深いフォーラムとなりました。なお、本学からは、山本理事（研究・国際交流担当）、竹田美和総長補佐（産学官連携担当）及び関係事務職員が参加しました。



スウェーデン王立科学アカデミー

(財)武田科学振興財団研究奨励金の贈呈式が行われる

財団法人武田科学振興財団奨学金贈呈式が、6月22日(水)、総長応接室において行われ、平成17年度研究奨励金が、内林政夫同財団理事長から各採択者に贈呈されました。

この奨励金は、医学、薬学、理学、工学及び農学のライフサイエンスに関する科学技術の進歩、発展に大きく貢献すると考えられる研究への助成を目的とするもので、贈呈

に際し、平野総長から奨励金を有効に活用するとともに、大学として研究等の発展に一層努力していきたいこと等の謝辞が述べられました。

続いて、採択された3名の研究者からそれぞれ研究概要の説明があり、和やかに懇談が行われました。

研究奨励金採択者及び研究題目は、次のとおりです。

- 大野 欽司 大学院医学系研究科教授
神経筋疾患のRNA病態・治療研究
- 菊池 裕 大学院理学研究科助教授
ゼブラフィッシュ胚を用いた内胚葉誘導・内胚葉性器官形成に機能を有する遺伝子の網羅的探索と機能解析
- 青木 撰之 大学院情報科学研究科講師
昼夜の環境変化に対する葉緑体機能の適応の分子基盤



謝辞を述べる平野総長

近藤文部科学審議官が本学を視察

近藤文部科学審議官が、7月7日(木)、本学を訪問し、平野総長から本学の概要について説明を受けた後、学内施設を視察されました。

最初に、災害対策室を訪れ、鈴木同室長及び福和伸夫環境学研究科教授から、地域防災力向上に向けた地域社会との連携協働の取り組み等について説明を受けました。

続いて訪れた近藤孝男理学研究科教授の研究室では、同教授のグループが世界で初めて成功した原始的な単細胞生物であるラン藻の生物時計を試験管内で再構築する技術について説明を受けました。

最後に、野依記念物質科学研究館を訪れ、北村雅人物質科学国際研究センター教授の案内で、野依良治特別教授の足跡等を紹介したケミストリーギャラリーや同教授の研究室を見学し、今回の視察は終了しました。



福和環境学研究科教授から説明を受ける近藤文部科学審議官

国立大学法人評価委員が本学を訪問

国立大学法人評価委員会委員等が、6月24日（金）、タスクフォースとして本学を訪問し、役員と約2時間にわたり、大学改革への取り組み状況等について意見交換を行いました。

この訪問は、国立大学法人評価委員会が、国立大学法人等の業務運営の改善・効率化に資する取り組みを把握、分



意見交換会の様子

析するとともに、大学関係者と意見交換を行うことにより、評価制度の有効性を高めることを目的とした試行的調査活動として行われました。

意見交換会は、同委員会から、飯吉厚夫中部大学総長、勝方信一読売新聞編集委員、宮内 忍日本公認会計士協会副会長が、また、本学からは、平野総長、理事、監事、関係総長補佐等が出席のもと行われ、平野総長から教育・研究の状況を含めた大学改革への取り組み状況について、山下理事（総務・企画関係担当）から本学における法人評価の状況について説明があった後、学長のリーダーシップによる資源配分、法人評価の状況、学生・教職員の意識改革、附属病院の財務内容等について幅広く意見が交わされました。

建物のユーザー満足度調査に伴う現地立ち入り調査を実施

建物のユーザー満足度調査に伴う現地立ち入り調査が、6月9日（木）、16日（木）の両日、文学部本館、教育学部本館、動物飼育心理実験室、環境総合館及び医学部基礎研究棟別館を対象に、杉浦理事（施設整備担当）及び関係職員により実施されました。

この調査は、建築（大規模改修）後の研究室等の施設利用に関する実態及びユーザーの意識を把握するとともに、

施設の不具合や利用上の問題点を明らかにするために行われるもので、建物の完成後概ね2年経過したものを対象に実施します。これらを基に、教育・研究環境の現状分析や改善策の検討を行うとともに、研究室等のよりよい環境づくりへのユーザー参加意識の向上を目指しています。また、今後建築計画のある建物の設計にも役立てています。

なお、調査結果は、取りまとめた上で、施設管理部のホームページに公開する予定です。



現地調査の様子

AED(自動体外式除細動器)を設置

本学では、AEDの使用が一般人にも認められたこと及び不測の事態に備えるため、下記のとおりAEDを学内に設置しました。

AEDとは、心臓に電気ショックを与えて、正常な状態に戻す医療機器のことで、また、除細動とは、心臓が細かく震えて血液が排出できない致死的不整脈を電気ショック



AED (本部2号館1階)

を与えることにより、その震えを取り除く処置のことをいいます。

設置に先立ち、今年4月に開催されたAEDの使用説明会では、AEDの使用方法だけではなく、救急救命法についての講演や、実際にAEDを使っでの救命措置の実技講習が行われ、参加者は真剣に取り組みました。

AED(自動体外式除細動器)設置場所

設置場所	連絡先
東山地区 保健管理室 本部2号館1階 全学教育棟保健室	内線3970 内線5979 内線3520
大幸地区 医学部保健学科	内線1504

* 鶴舞地区(医学部附属病院)にも設置されています。

文部科学省記者クラブにおいて記者発表を行う

研究成果に関する記者発表が、6月23日(木)午前10時から、文部科学省10階記者会見室において行われました。

これは、松岡 信生物機能開発利用研究センター教授、芦荻基行同助教授らの研究グループが理化学研究所及び(株)ホンダリサーチインスティテュート・ジャパンと共同で行った研究「イネの収量を決定する重要遺伝子同定」が



記者発表の様子

サイエンス誌に掲載されることに伴い行われたものです(研究内容の詳細については、本誌10ページ「知の先端」をご覧ください)。

会見には、松岡教授、芦荻助教授等が出席し、研究概要について説明した後、記者からの熱心な質問に対応していました。また、本学の広報担当職員も同席し、受け付けや進行を担いました。

本学では、「優れた研究成果をメディアを通して社会に積極的に発信する。」を中期計画に掲げ、強化しているところで、今後も同様の取り組みを積極的に行っていくことにしています。

なお、メディアを通じての教育・研究成果の発信については、総務企画部総務広報課(内線5773)までご相談ください。

イネの収量を決定する重要遺伝子を同定

— 「第2の緑の革命」につながる大きな一歩 —

芦苜 基行 生物機能開発利用研究センター助教授

松岡 信 生物機能開発利用研究センター教授

現在、アジア・アフリカを中心に慢性的かつ深刻な食糧不足が続いており、8億人の人々が栄養不足の状態にありますが、世界人口は爆発的に増加しており、国連人口予測では2050年には総人口が89億人に達するとされています。また、環境変動による急激な砂漠化・耕地の減少に伴い、食糧不足は世界的かつ深刻なレベルに達すると懸念されています。こうした食糧不足を回避するためには、現在の世界穀物生産量を50%増産しなければなりません。

イネをはじめコムギ、トウモロコシの3大穀類は人間や家畜のエネルギーの50%を賄っており、これら作物の増産が食糧危機に対する対策として求められています。

今回、名古屋大学・生物機能開発利用研究センターの研究グループは、理化学研究所、ホンダリサーチインスティテュート・ジャパンと共同で、我が国が中心となって行われたイネゲノムプロジェクトの成果を有効に利用して、イネの種子数を増加させる遺伝子を単離し、その機能を明らかにしました。この遺伝子(CKX)は、植物の細胞増殖や枝分かれを調節する植物ホルモンである、サイトカイニンを分解する酵素の情報を持っています。今回の研究で、CKX 遺伝子はサイトカイニンを分解することによりその量を調節し、イネの花の数、ひいては種子の数を調節していることを明らかにしました。つまり、CKX 遺伝子の機能を変化させることで、種子の数が増減し、



コシヒカリ (左) とハバタキ (右)

コシヒカリ (*japonica*) はハバタキ (*indica*) に比べ草丈が高く、穂当たりの子実粒数が少ない。またコシヒカリのように背が高いと風や雨で倒伏し収穫量が減少する。そこで、両者品種間での草丈と子実粒数の違いを決定している遺伝子の探索を行い、草丈を制御している植物ホルモンのジベレリン合成酵素遺伝子と粒数を規定している植物ホルモンのサイトカイニンの分解酵素を同定した。



コシヒカリ

コシヒカリ+ sd1

コシヒカリ+ Gn1

コシヒカリ+ sd1+ Gn1

重要農業形質遺伝子のピラミディング育種

従来品種のコシヒカリに草丈を低くする *sd1* と子実粒数を増やす *Gn1* を共導入すると、双方の形質が付与された。

収量の増減につながることを明らかにしました。

この研究は3大穀物の収量を調節している遺伝子を単離し、その働きを明らかにした世界初となる研究成果です。今回得られた成果は、そのままイネの品種改良に利用することが可能であり、すでに、コシヒカリに *CKX* 遺伝子を導入することで収量の増加したコシヒカリを作ることになりました。この収量増加コシヒカリは種子が付きすぎて、少しの雨風によっても倒れてしまうので、イネの背丈を少しだけ低くする遺伝子を同時に導入しました。こうして、収量が多くて風雨によっても倒れにくい理想的なコシヒカリを作ることにも成功しています。このような育種をピラミッ

ディング育種と呼んでおり、このような方法で、これからも画期的な新品種を作ることが出来ると考えています。

イネは、3大穀物中でゲノムが最も小さく、イネゲノムプロジェクトにより全ゲノム配列が解読されていることなどから、穀物のモデルとして位置づけられています。また、イネのゲノムはコムギやトウモロコシのゲノムとよく似ていることが分かってきました。このことは今回のイネの収量増加遺伝子の研究成果がコムギやトウモロコシにも直接応用できると考えられ、この遺伝子を利用した主要穀類の増産にも道が拓ける可能性が高いと期待されます。

2000年名古屋大学生物分子応答研究センター助手、2003年より名古屋大学生物機能開発利用研究センター助教授

あしかり もとゆき



1983年農林水産省・農業生物資源研究所研究員、1994年名古屋大学生物分子応答研究センター教授、2004年より名古屋大学生物機能開発利用研究センター教授

まつおか まこと



高分子の構造制御と機能

岡本 佳男 エコトピア科学研究所客員教授／名誉教授

私たちの周りには多種多様な高分子が存在しております。生体を構成するタンパク質、DNA、多糖はいずれも高分子であり、その分子量は数万、数百万に達します。これらの生体高分子は、高度に制御された構造をとって物質認識や情報伝達などの機能を発現し、生命の維持に重要な働きを演じます。高分子物質の存在が認められるようになったのは、1930年ごろであり、その後多くの高分子が重合反応により合成できるようになりました。高分子は、今やわれわれの日常生活、産業に欠くことのできない材料となっております。これらの合成高分子も構造制御を通じて、その性能が飛躍的に向上してきており、その一例は、スーパー

で支給される買物袋の強度で伺い知ることができません。構造制御により袋のフィルム強度は非常に強靱になりました。

私どもも高分子の構造制御の研究に長年取り組んできましたので、その成果の一端をご紹介します。ポリエチレンやポリスチレンなどの高分子は、出発原料のモノマーを鎖のようにつないでいく重合反応で合成できますが、これらの高分子の鎖は、柔軟であるため溶媒に溶かしますと様々な形をとります。しかし、かさ高いモノマーであるメタクリル酸トリフェニルメチルをキラル(不斉)な触媒を用いて重合させますと、右巻きなら右巻きだけの一方向巻のらせん高分子が生成し、かさ高い側鎖の留金効果のために高分子鎖の動きは制限され、溶媒に溶かしてもらせんが解けません。このことを見いだしたのは今から25年以上前のことですが、このような安定ならせん高分子が合成できることは、当時まったく予測されておられませんでしたので、非常に興味深いことでした。右巻きと左巻きの高分子は、ちょうど右手と左手のように重なり合わず互いに鏡像体(光学異性体)の関係になります。このように鏡像体が存在する化合物はキラル化合物と呼ばれ、一方向巻のらせん高分子はキラルで光学活性になります。おもしろいことに、このらせん高分子は、多くの光学異性体に対し、高い分離能力を示しました。野依良治先生はこの光学異性体の一方を選択的に合成できる不斉触媒の発見でノーベル化学賞を受賞されましたが、この高分子をスチール製のカラム(写真中手にしているもの)に充填して、その中に光学異性体を流しますと右手と左手の異性体が効率よく分離できることがわかりました。この光学異性

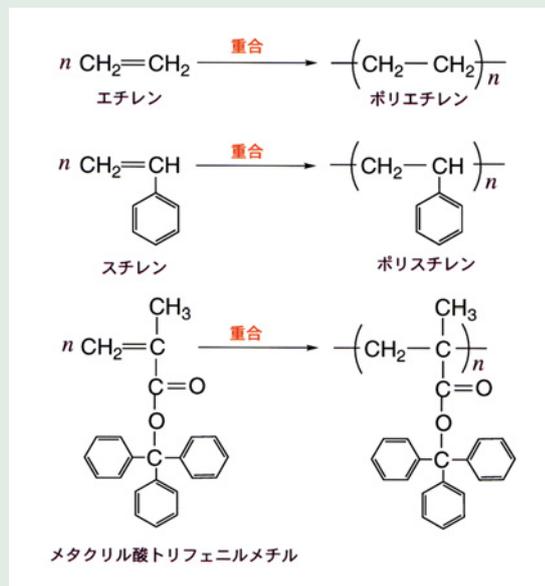


図1 エチレン、スチレン、メタクリル酸トリフェニルメチルの重合で得られる高分子

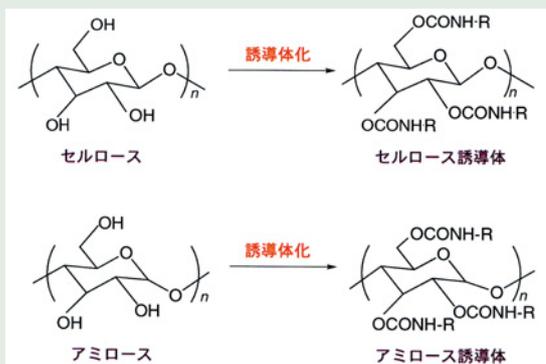


図2 セルロースおよびアミロースの誘導体化による光学異性体に対して高い分離能力を有するキラル高分子の合成

体分離用のキラル充填剤は、日本で最初のキラルカラムとして市販されました。

この発見に触発され、さらにすぐれたキラル充填剤の探索に取り掛かりました。その結果、天然のキラル高分子であるセルロースやアミロースなどの多糖を誘導体化し、その構造を制御すると、すぐれた光学異性体の分離能力をもつキラル充填剤が得られることがわかりました。これらの多糖は、地球上で最も豊富に生産される高分子ですが、高度に立体構造が制御されております。人類はこれらの多糖の立体構造に由来する性質の違いを利用して生存してきました。合成した多糖誘導体は、広範囲の光学異性体に対して高い分離能力を示しますので、今やキラル化学物を取り扱う世界中の研究者がこれらの誘導体を充填したキラルカラムを用いて光学異性体の純度を決めております。また、原料の多糖は入手しやすく大量にキラル充填剤がつくれますので、光学活性な化合物を工業的規模で生産するための手段として利用されだして

おり、キラルな医薬品の開発、生産のスピードアップに大きく貢献しております。

高分子は無限に作ることが可能です。その機能を引き出すうえで構造制御は極めて重要で大きな可能性を秘めています。

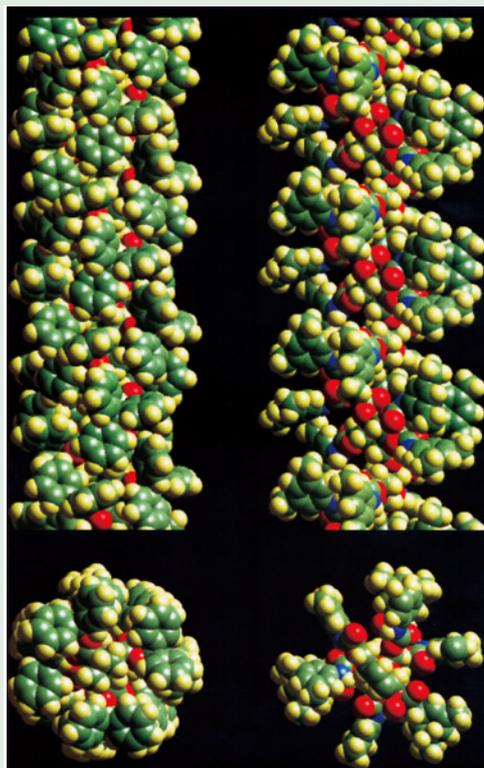


図3 ポリメタクリル酸トリフェニルメチル（左）およびセルロース誘導体（右）

1964年大阪大学理学部高分子学科卒業。1969年大阪大学大学院理学研究科博士課程修了。同年大阪大学基礎工学部助手、助教授を経て、1990年名古屋大学工学部合成化学科教授、1997年同大学院工学研究科応用化学専攻教授。2004年定年退官、名古屋大学名誉教授、名古屋大学エコトピア科学研究機構客員教授。2004年5月から高分子学会会長。2005年6月からJST さきがけ「構造制御と機能」研究総括、主な受賞は、高分子学会賞、日本化学会化学技術賞、ダ・ビンチ優秀賞、日本化学会賞、Chirality Medal、紫綬褒章、藤原賞。趣味：スポーツ

おかもと よしお



法科大学院における新しい教育の試み

— ICT を用いた実務技能教育の創造 —

菅原 郁夫 大学院法学研究科教授

2004年度より、名大にも法科大学院が設置されました。法科大学院は、法曹（弁護士・検察官・裁判官）の養成に特化した教育を行う専門職大学院です。法科大学院には、法律に関する基礎知識の他に、交渉・面接の方法や法律文書の作成方法などの、実務技能の教育も求められています。名大法科大学院では、各年次に理論教育科目と関連づけながら実務基礎科目を配置するなど、カリキュラム設計を工夫しています。とくに、実務技能に関してはコンピュータやインターネット（ICT：Information and Communication Technology）を効果的に活用した授業やそのシステムの開発を行っています。

実務技能はこれまで、そのほとんどはOJT（On the Job Training）の中で徒弟的に学ぶものでした。そもそも実務技能は、実際の実務という状況の中で必要とされるものです。弁護士の同じ言動が、状況次第では正反対の評価を受けることもあり得ます。しかし、いかなる技術が優れたものかは、文字化された情報ではうまく伝達できないところもありますし、伝達すべき状況も一過性のものであり、再現性がほとんどありません。そのため、これらの教育は、経験を通して行われる必要があるとともに、その実習に対する自己評価や、他の学生・授業者・専門家からのさまざまな評価が、各学生に適切にフィードバックされることが必要となります。実際に用いられている教育方法はさまざまですが、たとえば、教室内でできるものとしては、ロールプレイなどのシミュレーション学習があります。また、実際に弁護士事務所等で研修を行う臨床実習もあります。名大法科大学院では、とくに前者のシミュレーション学習に

あたり、ICTを効果的に利用することで、これらの教育をより効果的に行うことを目指しています。とくに実務技能教育の場面では、DRS（Digital Recording Studio）とSTICS（Stream Indexing and Commenting System）という2つのシステムを利用しています。DRSは模擬法廷教室における模擬裁判等の模様を記録するためのシステムで、法廷内に4台のカメラを設置し、裁判官、検察官、弁護士、証人を独立して撮影し、音声によって映像を切り替えるといったシステムを採用しています。STICSは、ロールプレイ等の映像記録をインターネット経由で配信し、学生や指導者が配信された映像を閲覧しながら、その映像の任意の場面にコメントを付せるようにしたシステムです。

これらのシステム導入の利点としてまず、記述化や伝達が困難であった実務技能を、映像や文字として容易に記録可能とした点を指摘できます。電子化されたことで、それらの記録に自由に何度



模擬法廷



STICSの画面

でもアクセスすることができるようにもなりました。次に、たとえば指導者がコメントを付すことで、より端的に場面の意義を伝達できるようになりました。そのコメントへの返答をすることで、オンラインでの双方向的なやりとりも可能です。さらにこれらのシステムを、インターネットを通して利用することで、学外の実務家からの指導や、学生の自宅での学習も容易になりました。

もちろん、これらのシステムをただ使いさえすればよいということではありません。現在は、授業の中でシステムがより効果的に活用できるよう、試行錯誤しながら授業のデザインを考えている段階です。

法科大学院での実務技能教育には、学生や教員、そして外部の専門家をも巻き込んだネットワークを形成し、全体として教育を行っていく環境が必要です。現在、名古屋大学法科大学院を中心に全国13校が協力し、模擬裁判等のシナリオやそれを基にした映像素材等の教材を作成し共有するプロジェクト（PSIM プロジェクト）が進行中です。このようにネットワークを広げ、そこからいわゆる「Good Practice」を収集・蓄積することが必要です。そしてその知見を基に、新たな教育デザインを提案し続けることが、私たちの課題であると考えます。

東北大学卒業、同助手、福島大学専任講師、同助教授、千葉大学助教授、同教授を経て、平成13年4月より現職。
 専門：法社会学、民事訴訟法
 著書：法律相談のための面接技法（共編）、法と心理学のフロンティアⅠ、Ⅱ（共編）など
 趣味：釣り、スキー

すがわら いくお



都市・地域と連携し共存するキャンパスに向けて

小松 尚 大学院環境学研究科助教授

私は1992年から施設計画推進室でキャンパス計画を担当してきましたが、教育研究施設の向上だけでなく、キャンパスという物理的環境がいかに周辺地域や広く都市環境の質的な向上に寄与できるかという視点がとても重要だと考えてきました。東山キャンパスを例に挙げれば、グリーンベルトをはじめ四谷山手通付近が街路に対してオープンなことや、東山の森へと続き、名古屋の東部緑地の一部をなすキャンパスの緑は、もはや大学単独の判断だけで変更してよいものではないと考えています。言い換えれば、大学の地域や都市に対する貢献とは学術面だけでなく、空間的な側面も非常に重要であるということです。

以上のような考えに立って私が携わった2つのプロジェクトについて紹介したいと思います。地下鉄工事後の四谷通（名大～本山）の街路修景事業と、市民のキャンパス探索ツアーについてです。

四谷通の修景事業は、地下鉄工事が終盤に差しかかった1999年から始まりました。通常、地下鉄工事後の街路復旧では、関係行政当局により工事前の状態に戻されます。しかし四谷山手通一帯では1980年代から地元の商店街や住民がこの通りの魅力アップのための議論と検討を重ねており、それが1993年の都市景観整備地区指定につながっていることから、地域関係者も街路修景計画に関与してもらって計画を策定したいという提案が都市景観室からありました。私を含む建築学教室のグループは名大という地元住民の立場と、計画をまとめる専門家の立場で参画しました。2000年2月までの間、現地調査や図面、模型による計画案検討、さらには豊田講堂前テラスでの舗装材の試験貼りによる性能、デザイン確認などまでに及びま

した。当初、このような体制と方法による計画策定は四谷通の修景事業だけの予定でしたが、ここで築かれた協働体制は本山交差点および山手通（名大～八事）の修景計画にも継承されていきました。この過程の中で、名大駅地上部や駅出入口の計画も検討されました。よって、地下鉄駅周辺のデザインは地域の方々と一緒に実現したともいえ、この成果は隣接するIB電子情報館とともに平成16年度愛知まちなみ建築賞という形でも評価されることになりました。

次にキャンパス探索ツアーについてです。名大駅オープンの際はちょうど東山キャンパスで新しい建物が次々と完成する時期でもありました。特に野依先生のノーベル賞記念建物は多くの関心を呼び、私の元にくつもの団体から視察の依頼がありました。一方で私は、2001年から千種区の「文教地域の学習環境づくり」^{註1}というまちづくり事業に参画しており、毎回のイベント後に「次回是非名大キャンパスを見たい」という多くの市



豊田講堂前テラスで行われた舗装材の検討

註 1) 詳しくは <http://www.chikusa.city.nagoya.jp/bunkyou/16/meidai16.html> を参照して下さい。
2) 詳しくは日本建築学会「キャンパスマネジメントハンドブック」(2004) を参照して下さい。



修景された四谷通と新設の地下鉄出入口およびIB電子情報館

民の意見に応じて、2004年5月の土曜日に「名大キャンパスの秘境を探れ」と題されたツアーを開催しました。建物だけでなく大学やキャンパスの歴史、エピソードを紹介しながら約3時間、約70名の老若男女の参加者を案内しました。終了時に簡単なアンケートをお願いしたのですが、そこには大変興味深い感想が数多く記されていました。開放的だといわれながらも一般の市民にとってはまだまだ心理的な敷居が高いが知的な雰囲気はよかった、豊田講堂の東側も名大の敷地とは知らな

かった、今度は違ったテーマでキャンパスの魅力に触れたい等。特に、キャンパスの緑の豊かさに感嘆した声が多く、それに気をよくして(!)、今年9月にキャンパスの緑をテーマにしたツアーを、山本進一理事のご協力を得て開催する予定です。

これからの大学キャンパスは都市や周辺地域と「連携」して「共存」するものだと思います。欧米では都市計画や都市経営に大学やキャンパスが位置づけられ、連携的な政策や計画を推進する例が数多く見られます。^{註2}日本はまだそのような状況に至っていませんが、名大は学術面だけでなく、良好な都市・地域環境の形成を促す力を持ったキャンパスを有する大学だと確信しています。多面的に都市や地域と交わることによって、名大キャンパスの魅力や可能性は一層引き出されてくるはずです。



市民によるキャンパス探索（野依記念物質科学研究館にて）

不自由人



学内では、教授、附属図書館長、評議員などの仕事のほか、全学同窓会の代表幹事をし、学外では、学会の支部幹事長や国際会議の実行委員長など、種々の役割で毎日忙しくしています。趣味は、クラシック音楽、テニス、読書、映画、観劇、自然観察、ごろ寝と多い方ですが、時間がなく休止中のものも多いです。特に、読書については、読書量が附属図書館長になって格段に少なくなっています。昼間は図書館職員の一員として活動しており、本に囲まれているにもかかわらず読めないということは、まさに苦痛です。それでも1週間の内、日曜日の午前中だけは、自分の時間としています。月1回の母を連れての教会（聖公会）通いも含んでいますが、他の週は、自然観察会と探鳥会などに行っています。自然観察については趣味の世界であり、自由人であるべきところ、凝り性（ただし、人の役に立ちたいという性格）が災いして、今年、自然観察の本を出してしまいました。また、家内とのコンサート通いも、子供が産まれてからずっと遠のいていましたが、数年前から復活しています。

館長になってから外国出張もままならない状況でしたが、最近、久しぶりに国際会議（ローマ）に行き、発表と討論をしてきました。アメリカ人の若い友達（Prof. Horvath、カリフォルニア大学バークレイ校）が、特別セッションを企画し呼ばれました。彼が、ちょうど Tenure（永久在職権）をとったところで、メールで一生の内で最もうれ

しいというメッセージを送って来たため、お祝いも兼ねて行かざるを得なくなったのが真相です。

帰りの飛行機の中で時間があり（往きは論文発表のためのスライド作り）、座席に Video-on-demand が付いていましたので、最近、封切りされた英語字幕のついた日本の映画を見ました。大変よかったので、帰ってからその映画の DVD を早速買って、東京に下宿している長男に、その旨を連絡しました。長男からメールで、「映画は見えていませんが、原作を読みました。かなりいい出来だったので暇があれば（ないか）読んでみてください。」という返事でした。ここまで、書かれたらほっておけないので無理をして原作を読みました。映画にはない味わいがあり、やはり文字（文学）の与える力は強いと思いました。この本の作者風書くと、「息子と同じ時代を共有できて幸せでした。」という心境でした。

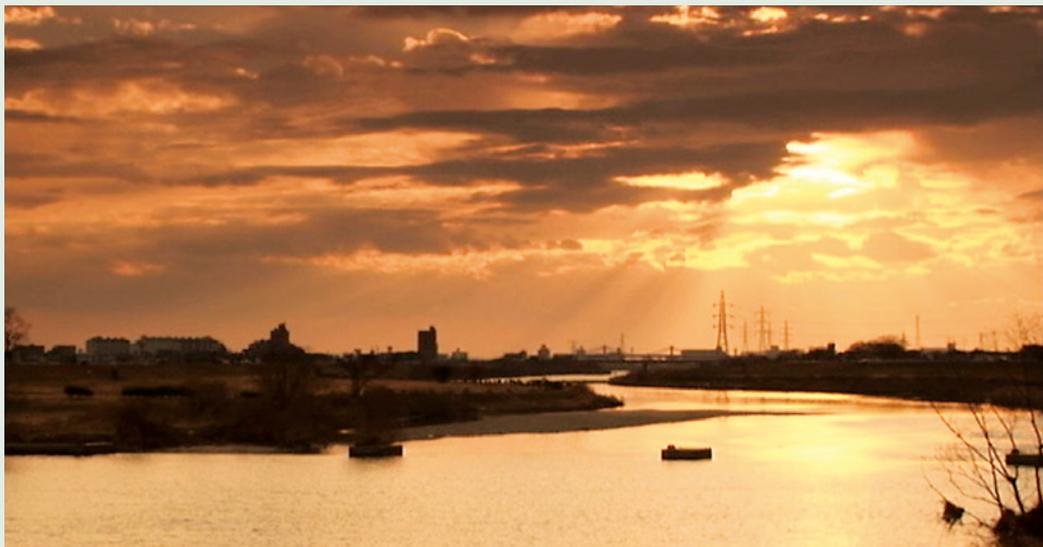


伊藤 義人
全学同窓会副会長
自然観察会
平和な
自然と公園の
おしゃや

1 Prof. Horvath とローマで
2 自然観察会から出した本の表紙

映画制作の面白さを教えてくれたショートフィルム

大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻博士課程後期課程3年
服部 達哉



- | | |
|-------|---------------|
| 1 | 1 映画のワンシーン |
| 2 3 | 2 撮影現場の様子 |
| | 3 子役に演出をつける筆者 |

私は、目下、二役を演じています。博士論文の執筆に苦悩している大学院生の役と、映画やCMの制作に熟をあげているプロデューサーの役です。

世間でプロデューサーをしていると言うと、「食っていけるのか?」と聞かれます。答えは、「なんとか食っている」といったところです。食い扶持の出所は、札幌の映像コンテンツ制作団体「アクティブフィルムメーカーズ」です。そこに所属し、学校関係のCMや、観光PRなどのプロデュースをしています。プロデュースをするということは、営業、企画、予算の管理などの責任者だということです。私は今、学問で身に付けた知識を実践の場で試し、そこで得た経験が、再び学問の糧となることを実感しています。そしてこの実感が、「楽しさ」と「充実感」、プロデュースした作品と現場のスタッフに対する愛着を生み出しています。

今回、国際言語文化研究科のメディアプロ



フェッショナル論講座によるショートフィルム制作のプロデュースをさせていただきました。講座の学生たちには映画制作の経験はなかったのですが、トヨタ自動車やソニーマーケティングなどの企業の協力も得て、ショートフィルム『由貴の休日』を完成させました。

『由貴の休日』は、愛・地球博で開催されるショートショートフィルムフェスティバル EXPO2005 の受賞ノミネート作品に選ばれ、万博会場での上映が決定しています。コンテンツとしても商品価値を見出され始めたショートフィルムは、資金や技術が十分ではない中で映画製作に励んでいる若手クリエイターの出世の機会として注目を集めています。将来、メディアプロフェッショナル論講座に関わった人たちの中からプロの映画制作者が出ることを願っています。これは、現実離れた夢などではありません。

アクティブフィルムメーカーズHP
<http://www.activefilmmakers.com>
 ショート・ショートフィルムフェスティバル公式サイト
<http://www.shortshorts.org/EXPO2005/>



はっとり たつや
 1975年9月30日生まれ
 愛知県名古屋生まれ

第54回東海地区国立大学体育大会

—男子総合優勝、女子3位—

第54回東海地区国立大学体育大会が、6月25日(土)・26日(日)、7月2日(土)・3日(日)の4日間、三重大を当番校として開催され、同大学及び近隣運動施設を利用し、20種目で競技が実施されました。

梅雨時にもかかわらずほぼ好天に恵まれ、各競

技場で熱戦が繰り広げられました。その結果、男子は2年ぶり17回目の総合優勝を、また、女子は総合3位の成績を修めました。

なお、来年度は、本学が当番校となり開催される予定です。

第54回東海地区国立大学体育大会総合得点表

■男子

競技種目	三重大		名大		岐阜大		名工大		豊技大		愛教大		浜医大		静岡大		備考
	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	
1 陸上競技	5	4	4	5	3	6	6	3	7	2	1	10	8	1	2	8	
2 水泳	3	6	1	10	4	5	6	3	8	1	5	4	7	2	2	8	
3 硬式野球	1	8	3	5	5	2	5	2	4	4	5	2			2	6	
4 準硬式野球	1	10	3	6	5	2.5	5	2.5	4	5	2	8	5	2.5	5	2.5	
5 テニス	5	2.5	1	10	5	2.5	4	5	5	2.5	5	2.5	2	8	3	6	
6 ソフトテニス	2	6	5	3	7	1	4	4			3	5	6	2	1	8	
7 バスケットボール	7	2	2	8	1	10	4	5	6	3	5	4	8	1	3	6	
8 バレーボール	7	2	2	8	3	6	4	5	6	3	1	10	8	1	5	4	
9 卓球	4	4	2	6	1	8	5	3	棄権	0	6	2			3	5	
10 バドミントン	3	6	1	10	2	8	5	4	7	2	8	1	6	3	4	5	
11 サッカー	2	8	4	5	3	6	7	2	8	1	6	3	5	4	1	10	
12 ハンドボール	6	2	5	3	2	6	4	4			1	8	7	1	3	5	
13 柔道	5	3	3	5	1	8	6	2	棄権	0	4	4			2	6	
14 剣道	4	4	1	8	5	2	5	2	5	2	2	6			3	5	
15 空手道	4	5	5	4	3	6	6	3	7	2	8	1	1	10	2	8	
16 弓道	5	2	2	6	1	8	3	5			5	2	5	2	4	4	
17 体操	4	2	2	4	1	5					5	1			3	3	
18 馬術	1	6	4	2	4	2	2	5			3	4			4	2	
19 アーチェリー	3	3	1	5	2	4					5	1			4	2	
20 少林寺拳法	3	4	1	6	5	2	6	1			2	5			4	3	
合計得点		89.5		119		100		60.5		27.5		83.5		37.5		106.5	
男子順位	4		1		3		6		8		5		7		2		

■女子

競技種目	三重大		名大		岐阜大		名工大		豊技大		愛教大		浜医大		静岡大		備考
	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	
1 陸上競技	3	5	5	3	4	4	6	2			1	8	7	1	2	6	
2 水泳	3	5	4	4	1	8	7	1			2	6	5	3	6	2	
3 テニス	5	2	1	8	3	5	5	2			4	4	2	6	5	2	
4 ソフトテニス	2	5	6	1	4	3					1	6	5	2	3	4	
5 バスケットボール	2	4	3	3	4	2					1	5	5	1			
6 バレーボール	3	4	5	2	2	5					1	6	6	1	4	3	
7 卓球	1	6	3	4	4	3	6	1			5	2			2	5	
8 バドミントン	3	5	1	8	4	4	7	1			5	3	6	2	2	6	
9 ハンドボール	②				①												オープン
10 剣道	4	2	3	3	5	1					2	4			1	5	
11 空手道	4	4	2	6	5	3	6	2	7	1			1	8	3	5	
12 体操			②		③										①		オープン
13 弓道	1	8	4	4	3	5	5	3			2	6	7	1	6	2	
14 アーチェリー	2	3	1	4	3	2					4	1					
合計得点		53		50		45		12		1		51		25		40	
女子順位	1		3		4		7		8		2		6		5		



1	2		1 男子総合優勝
3	4	5	2 弓道
6	7	8	3 ソフトテニス
			4 バレーボール
			5 陸上競技
			6 アーチェリー
			7 準硬式野球
			8 閉会式



第59回大阪大学・名古屋大学対抗競技大会

第59回大阪大学・名古屋大学対抗競技大会（名阪戦）が、主に5、6月の土、日曜日に、大阪大学を当番校として開催されました。

今年度は、ラクロス（女子）が新たにオープン競技として加わり、ラクロス（男子）とアーチェリー（女子）が成績加算種目に、また、ボート（女子）が正式種目となりました。

今大会は、男子が本学の12勝18敗、女子が6勝6敗という結果に終わり、総合優勝を逃しました。なお、通算成績は、男子が本学の19勝36敗4分け、女子が15勝33敗6分けとなりました（総合優勝の制度が導入された第20回から今回までの総合優勝通算成績は、本学の16勝22敗2分けです。）。

本学が当番校となって来年度開催される予定の第60回大会では、本学の一層の奮起が期待されます。

第59回大阪大学・名古屋大学対抗競技大会成績表

競技種目	対戦結果		競技種目	対戦結果	
	名大	阪大		名大	阪大
スキューバ	×	○	弓道	○	×
空手	×	○	バスケットボール	×	×
ライフル射撃	×	○	ボート	○	×
弓	×	○	バドミントン	○	×
バスケットボール	○	×	陸上競技	○	×
柔道	×	○	硬式テニス	×	○
水泳	○	×	アーチェリー	(不開催)	
ラクロス	×	○	バレーボール	○	×
ボート	○	×	剣道	×	○
空手道	×	○	体操競技	×	○
自動車競技	○	×	ソフトテニス	○	×
サッカー	(引き分け)		フィギュアスケート	×	○
バドミントン	○	×	卓球	×	○
陸上競技	×	○	ラクロス	(新種目のためオープン)	
アイスホッケー	×	○	女子成績	6勝	6勝
ゴルフ	×	○	総合成績	18勝	24勝
準硬式野球	○	×			
硬式テニス	×	○			
ラケット	○	×			
少林寺拳法	×	○			
アーチェリー	×	○			
バレーボール	×	○			
ハンドボール	×	○			
剣道	×	○			
体操競技	○	×			
ソフトボール	○	×			
アメリカンフットボール	○	×			
ソフトテニス	×	○			
フィギュアスケート	○	×			
硬式野球	○	×			
卓球	×	○			
ヨット	(不開催)				
男子成績	12勝	18勝			

工学部懇話会を開催

－今後の高大連携の在り方について－

工学部懇話会が、6月29日（水）、工学部4号館大会議室において、「今後の高大連携の在り方について」をテーマに、愛知、岐阜、三重の東海3県を中心に63の高等学校から73名の教諭が参加して開催されました。

この会は、工学部の先進的研究をわかりやすく紹介し、その中で活躍している大学院学生との直接対話を通して、



大学院学生の研究発表を聞く参加者

研究や学生の成長を理解してもらい、また、今後の大学のあるべき姿について、高等学校教諭と工学部教員とが忌憚ない意見交換を行うことにより互いの理解を深めることを目的として、毎年この時期に開催されているものです。

会に先立ち、澤木工学研究科長からあいさつと会の趣旨説明があった後、高大連携の現状及び高大連携に寄せる期待について、大学側及び高等学校側からそれぞれ報告がありました。続いて、参加者は、13の班に分かれ、各研究室を見学し、大学院学生による研究発表を聞くとともに、大学院学生と熱心に議論しました。その後行われた自由討論では、高校側からの「もっと大学が行っている様々な研究や活動等について、高校生にもわかりやすく情報を発信して欲しい」との要望に対し、大学側が「要望に応えられるように積極的に取り組んでいきたい」と答えるなど、活発な意見交換が行われ、高等学校と大学との新しい連携方法を探るよい機会となりました。

公開シンポジウム「国際報道はいま」開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、6月30日（木）、文系総合館カンファレンスホールにおいて、メディアプロフェッショナル論講座公開シンポジウム「国際報道はいまーあなたの知らないもう一つの『戦場』」を開催しました。

同講座は、平成15年にメディアに携わる優れた人材の育成を目的として開設されたもので、3回目となる今回のシンポジウムには、約120名の参加があり、テロ・戦争報道に経験の深いベテラン記者の論議に熱心に耳を傾けていました。

シンポジウムでは、吉田正也同研究科教授がコーディネーターを務め、エドワード・ヘイグ同研究科助教授が、メディア研究者の立場から、公正で多角的な報道等について提起しました。

また、真能秀久中日新聞社社会部長が、米中枢同時テロの現場取材体験から、世界貿易センタービルの惨劇を生々しく語り、「アメリカよ立ち上がれ」と叫ぶ米国社会の変化とメディアの役割を説明し、湾岸戦争を取材した柳沢秀夫NHK解説委員は、「米国もイラクもメディアを戦争に利用した点では同じであり、まさに情報戦争だ」と報告しました。両氏は、生命の危険を冒してまでニュース現場

に近付きたい国際報道記者の実態を語り、ジャーナリスト志望の学生に「情報を疑うこと」、「好奇心を常にもて」等の貴重なアドバイスを伝えました。



シンポジウムの様子

先端技術公開セミナー開催

●大学院情報科学研究科



講演する野口トヨタ自動車(株) IT・ITS 企画部主査

大学院情報科学研究科は、7月5日(火)、IB電子情報館東棟大講義室において、トヨタ自動車(株) IT・ITS 企画部主査の野口好一氏を講師に招き、先端技術公開セミナー(講演会)を開催しました。

セミナーでは、阿草同研究科長のあいさつの後、野口氏が「ITSによる交通社会の変革」と題して、ITS(知的交通システム)について、80分間にわたり講演を行いました。野口氏は、ITSは、狭義には、交通事故、渋滞や環境破壊といったクルマ社会がもたらした様々な問題を、主として情報通信技術を用いて解決する手法であるが、広義には、まちづくり等も含めた広範な社会システムと捉えられると述べ、具体的な取り組みや、昨年、名古屋市で開催されたITS世界会議、愛・地球博と連携して進行中のITS EXPO等について紹介しました。また、個人的には、理想の車はナイトライダーである(人と車の人馬一体)という話もあり、全般的に、和やかな雰囲気セミナーとなりました。

エコトピア科学研究所が慶南大学校 産学協力団と学術交流協定を締結

エコトピア科学研究所は、6月13日(月)、慶南大学校において、松井同研究所長と同大学校産学協力団の高義石団長が学術交流協定書に署名し、同協定を締結しました。

慶南大学校は、1946年に設立された900名の職員と15,000名の学生を擁する大学で、産学協力団は、昨年3月に同大学校の産学官の連携の中心的な役割を担う部局として設立され、地域連携を強力に推進して、教員、学生、企業に対する多様なインセンティブを付与しています。

産学協力団とエコトピア科学研究所の間では、旧センター時代を含め、ナノマテリアル、エネルギー科学、環境システム・リサイクル分野における共同研究をはじめとした相互の研究者の交流を活発に行ってきただけでなく、

外国人客員教授として教授を産学協力団から迎えてきました。今回の締結により、研究者の交流、学術資料や刊行物の交換、研究集会の共同開催等を通して、環境調和型持続可能社会の構築に向けて、学術交流がさらに拡充され、両国における研究の発展につながることが期待されています。



学術交流協定式の様子

エコトピア科学研究所がINAXと 連携実施協定を締結

エコトピア科学研究所は、6月23日(水)、松井同研究所長と山中株式会社 INAX 総合技術研究所長が連携実施協定書に署名し、同協定を締結しました。

この協定は、同研究所と INAX 総合技術研究所の研究開発の強化、加速及び学術研究活動の活性化を図るとともに、研究者・技術者の育成に貢献することを目的としており、具体的には、①エネルギー・環境・材料・情報をはじめ広い分野での共同研究・受託研究の実施、②最新技術に関する情報交換及びそれに基づく研究テーマの発掘、③研究者、技術者及び大学院学生の育成の3項目で連携していきます。また、この協定を円滑に進めるために、双方の代表者からなる連携協議会とその下部組織の技術情報交

換会及び個別の連携研究を推進する研究推進チームを組織し、連携項目について協議し、実施します。なお、協定の有効期間は、締結日から平成20年3月31日までとし、期間満了の2か月前までに再延長について協議することとしています。

これまでも、本学と INAX は、分野毎の研究を個々に実施し、また、同研究所では研究者を客員教授として迎えていましたが、今後は、連携協議会の主導のもと、同研究所と総合技術研究所で、ニーズ・シーズのマッチングを図ることにより、他分野にまたがる複合的な研究テーマでの連携が可能になるとともに、研究の実施に当たっては、双方の関連分野の研究者が有機的に連携することにより、効果的・効率的な研究推進が期待できるなど、双方にとってより有益な連携活動が展開できると期待されています。

附属図書館が企画展「説話(はなし)の書物」を開催

附属図書館及び附属図書館研究開発室は、本学において説話文学会の大会が開催されることを機に、6月17日(金)から7月8日(金)まで、大学院文学研究科及び説話文学会と共催で、企画展「説話(はなし)の書物－小林文庫本を中心に－」を開催しました。

説話とは、落語の源流とも言われるように、神話や仏教靈驗譚から滑稽卑俗な世間話までも含む、様々に語り伝えられ、書き継がれてきた話です。また、附属図書館が所蔵する小林文庫は、国文学者の小林忠雄氏(1908～1960年)旧蔵の説話文学関係古典籍673冊で構成され、主要な説話集について数多くの版本・写本を集めた学術的価値の高いコレクションとして知られています。

今回の企画展では、中世庶民の生活感覚や生きる知恵を豊かに伝える資料として、鎌倉時代に長母寺(名古屋市東区)の住持を務めた無住の「沙石集」や現存する唯一の伝本とされる「内外因縁集」など、小林文庫から選り抜かれた室町時代から江戸時代の写本や版本50点余が展示されました。また、関連資料として、能「善界(ぜがい)」の絵



企画展

屏風や庚申信仰に用いられた室町時代の青面金剛像(いずれも個人蔵)が掲げられ、展示に一層の彩りを添えました。

3週間にわたる開催期間中、本学の学生、教職員のほか、学会関係者や一般市民も含め、630名近くの入場者があり、熱心に鑑賞していました。小林文庫の全体像に迫る企画として学会関係者の評価も高く、入場者に配布した展示図録については、詳細な書誌情報に加え、コラムも充実しており読み応えがあると、一般の方々を含め大変好評でした。

また、企画展に関連して、7月2日(土)には、ギャラリートーク「説話集、その豊穡なる世界」が開催されました。塩村 耕文学研究科教授の司会のもと、渡辺信和同朋大学仏教研究所研究室長、阿部泰郎文学研究科教授の巧みな口演で、古人(いにしえびと)が話し、語り、記述し、書物に編まれ、時代を超えて読み継がれてきた説話の歴史や意義が縦横に語られました。参加者からも、説話における女性イメージ等の質問が次々と出されたほか、トーク終了後は、展示会場に場所を移し、多くの参加者が口演者とともに説話の世界を堪能しました。



ギャラリートーク

物質合成研究拠点機関連携事業発足式を開催

●物質科学国際研究センター

物質合成研究拠点機関連携事業発足式が、6月30日(木)、野依記念物質科学研究館野依記念講演室において開催されました。

この事業は、あらゆる基礎学問の進歩と新技術開発の基盤となる「物質合成研究」において世界をリードするための新たな機関連携研究体制を構築することを目的として、平成17年4月から、文部科学省特別教育研究経費（大学間連携経費）により、物質科学国際研究センター、京都大学化学研究所附属元素科学国際研究センター、九州大学先導物質化学研究所が中心となり、3大学により開始されたもので、5年の事業期間が予定されています。また、これは、約10年前に、本学、九州大学、京都大学にて順次発足した中核的研究拠点（COE）形成プログラムの研究グループが連携し、各拠点のこれまでの成果を基に物質合成研究の中核的研究拠点の中の「中核」を形成しようとするもので、目標達成に向け、各大学に連携推進ラボを設置して「組織横断型研究課題」と若手研究者が提案する「テーマ提案型研究課題」を実施します。さらに、大学院学生を含む若手



ポスターセッション



パネルディスカッション

研究者の育成も同事業の重要課題の一つとして推進され、幅広い知識と複眼的思考を備えた次世代を担う人材を育成します。

発足式には、3大学の関係者、事業評価委員、招待者等、約100名の参加があり、最初に、平野総長のあいさつ、異物質科学国際研究センター長による事業内容の説明があった後、村井眞二日本化学会会長による「National Innovation Initiative：米国の新しい動き」と題する記念講演が行われました。また、コーヒープレイクを兼ねて、隣接するケミストリーラウンジでは、ポスターセッションが行われ、3大学実施メンバーの研究内容と各大学の連携実施体制が紹介されました。続いて、同センターの客員教授でもある松本和子早稲田大学教授による「日本の科学技術政策」と題する記念講演があり、最後に、「物質合成研究の将来と我が国の研究体制」と題したパネルディスカッションが、異センター長の司会のもと、理化学研究所理事長の野依良治特別教授、岩村 秀日本大学大学院教授、村井日本化学会会長、玉尾皓平理化学研究所フロンティア研究システム長、松本早稲田大学教授が参加して行われました。各パネリストから、同事業に対する有意義なコメントやアドバイスが出されるとともに、会場からも多くの意見が出るなど、予定時間を大幅に超える活発なものとなりました。

情報連携基盤センターが外部評価を実施

情報連携基盤センターは、7月8日（金）、同センター会議室において、3名の学外有識者を評価委員として外部評価を実施しました。

同センターは、平成14年4月に大型計算機センターを改組し、設置された全国共同利用施設で、近年のめざましい情報科学の進展とそれに伴う広範な計算機利用に呼応し



外部評価の様子

て、大学における諸活動の情報化支援とそのため基盤環境の整備・運用を行うとともに、世界最高水準のスーパーコンピュータや大型汎用コンピュータを導入し、研究者の多様かつ大規模な計算要求に応えています。

設置後3年を経過したのを区切りに、これまでのサービス活動や研究活動を中心に外部評価を行い、各評価委員からは、センターのさらなる発展のための貴重な意見や助言がありました。

同センターでは、この外部評価の内容を外部評価報告書としてまとめ、年内を目途に関係機関に送付するとともに、Webで公表する予定です。

[外部評価委員]

安達 淳 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立情報学研究所開発・事業部長

下條 真司 大阪大学サイバーメディアセンター副センター長

姫野龍太郎 独立行政法人理化学研究所情報基盤センター長

セミナー「国立大学法人化の下での高等教育の将来像」を開催

●高等教育研究センター

高等教育研究センター客員教授セミナー「国立大学法人化の下での高等教育の将来像」(天野郁夫国立学校財務・経営センター研究部長)が、7月12日(火)、文系総合館カンファレンスホールにおいて開催されました。

天野氏は、今日の日本の高等教育が、大学設置基準や国立学校設置法、国立学校特別会計によって管理・統制された「閉鎖系」の高等教育システムから、事後チェックを旨とする「開放系」の高等教育システムへと移行しつつあり、一連の改革によって国立大学とその外部の世界を隔ててきた境界は融解・消滅しようとしている(教育課程や学部名称が自由化され、明治以来の講座制も大講座化によって廃止されたこと。かつてタブー視された産学官連携は大学人にすら当然のこととして受け止められるようになったこと。入学資格の緩和によって、いわゆる「社会人学生」向けの課程や学位が新設されたこと。)と述べました。国立大学法人評価委員会等の認証評価機関、専門分野別の評価機関など、評価機関は様々あり、また、国立大学内でも、既存の組織体制と新しい組織の接合が求められている状況を踏まえると、外部から見ても内部においても、国立大学は新しい秩序構築への模索段階にあるといえると話しました。

なお、セミナーの詳細は、高等教育研究センターのホームページ(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/index.html>)をご覧ください。



セミナーの様子

シンポジウム「アジアの環境法－法の整備から執行・遵守の確保へ」を開催

●法政国際教育協力研究センター・大学院法学研究科



法政国際教育協力研究センターと大学院法学研究科は、7月9日（土）、10日（日）の2日間、シンポジオンホールにおいて、名古屋大学万博記念国際フォーラムのサテライトシンポジウム「アジアの環境法－法の整備から執行・遵守の確保へ」を開催しました。

このシンポジウムは、文部科学省科学研究費補助金（特

定領域研究）「アジア法整備支援～体制移行国に対する法整備支援のパラダイム構築」の研究成果を公表するために開催されたもので、昨今の環境問題に対する関心の高まりを反映してか、内外の研究者のみならず、NGO・NPO関係者をはじめとする学外からの参加も多数あり、150名近くの参加がありました。

アジア諸国では、1970～80年代に始まった環境法の整備が1992年の地球サミット以降、とりわけ21世紀に入って急速な進展を見せるとともに、東南アジア、中央アジア等の市場経済移行国においても、実効性のある環境法の整備と執行を図る必要に迫られています。

シンポジウムでは、平野総長、佐分法学研究科長、小島敏郎環境省地球環境局長によるあいさつの後、アジア12か国、ニュージーランド及びUNEP（国連環境計画）の法学者又は行政・司法の実務担当者から、各国の環境法の整備状況と法施行・遵守の確保上の課題に関する報告がありました。これを踏まえてパネルディスカッションとワークショップが行われ、実効性のある法整備のあり方、法の執行・運用上の改善を図るための方策が検討されました。



シンポジウムの様子

「大学から社会への情報発信」研究会を開催

「大学から社会への情報発信」研究会が、6月23日（木）、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この研究会は、平成16年度文部科学省科学研究費補助金萌芽研究「大学から社会への情報発信の研究」（研究代表者・福井康雄理学研究科教授）の研究活動の一環として、400余りの国公私立大学の協力を得て実施された情報発信の現状についてのアンケート調査の最終報告とともに、大学の情報発信について交流を深めるために開催されたものです。

最初に、山下副総長による広報の重要性を含めたあいさつ、福井教授による同研究会の趣旨説明があった後、研究メンバーの金井篤子教育発達科学研究科教授からアンケート調査の結果と分析の報告がありました。続いて、国立大学本部の立場から、坂部俊樹総長補佐（広報担当）が本学の広報体制の検討について、国立大学部局の立場から、前田正史東京大学生産技術研究所所長が部局での取り組みについて、また、私立大学の立場から、松田正吾名城大学広報課長が同大学の現状について報告しました。最後に、（株）電通統合マーケティング局の齋藤淳一氏から、全国大学の広報改善の動きを俯瞰する報告を受けた後、黒田

光太郎工学研究科教授の司会による全体討論が行われました。この種の試みとしては初めてもので、今後の情報発信を進める上で貴重な機会となりました。

なお、同研究会の詳細は、<http://media.lang.nagoya-u.ac.jp/houga2004/> をご覧下さい。



シンポジウムの様子

博物館第41回特別講演会開催

— どこにでもある電子が時を刻む —



講演する水垣産業技術総合研究所主任研究員

博物館は、6月30日（木）、第8回特別展「時を測る」の関連行事として、水垣桂子産業技術総合研究所主任研究員による第41回特別講演会「どこにでもある電子が時を刻む」を開催し、市民や本学の学生など約50名が参加しました。

水垣氏は、つくば市にある産業技術総合研究所で発電などに利用できる地熱の研究に携わっています。また、原子や電子を用いた「時計」についての研究もしており、今回の講演では、特に、電子スピン共鳴年代測定法の原理や仕組みについて身近な現象を例にわかりやすく解説しました。この測定法は年代以外にも様々な測定に応用できますが、実施している機関はまだ世界でも少ないとのことでした。講演後の質疑応答では、会場から多くの質問があり、活発な意見交換が行われました。

●国際企画室長



早川 操
(はやかわ みさお)

専門分野：教育哲学

〈略歴〉

昭和57年4月 市邨学園短期大学講師
昭和60年4月 市邨学園短期大学助教授
昭和62年4月 名古屋大学助教授（教育学部）
平成10年4月 名古屋大学教授（教育学部）
平成12年4月 名古屋大学教授（大学院教育発達科学研究科）
平成16年4月 名古屋大学総長補佐（国際連携担当）
（～H18. 3. 31）
平成16年9月 名古屋大学国際学術コンソーシアム推進室長
（～H18. 8. 31）
平成17年7月 名古屋大学国際企画室長（～H19. 6. 30）

●財務部長



松川 誠司
(まつかわ せいじ)

〈略歴〉

昭和63年4月 文部省採用
昭和63年8月 文部省高等教育局医学教育課
平成2年3月 文部省初等中等教育局中学校課
平成4年2月 文部省教育助成局地方課
平成6年5月 文部省学術国際局国際企画課
平成7年6月 防衛庁教育訓練局教育課
平成9年5月 京都大学庶務課
平成10年10月 文部省大臣官房調査統計企画課課長補佐
平成11年4月 文部省学術国際局学術課課長補佐
平成13年1月 文部科学省研究振興局振興企画課学術企画室長
平成15年7月 文部科学省高等教育局学生課大学入試室長
平成17年7月 名古屋大学財務部長

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
1 燃料になる水素を車と住宅両方に供給するシステムの研究を東邦ガスと共同で開始	6.16 (木)	中日 (朝刊)
2 法学研究科がウズベキスタンの現状を考える研究報告会を開催 市橋克哉・法学研究科教授と樹神成・三重大学教授が報告	6.16 (木)	中日 (朝刊)
3 7月から本格的に始まる ITS の実験を検証するため15日に設立された検討会 (代表・森川高行・環境学研究科教授) は南大津商店街振興組合やデンソーなどの企業で作る「インターネット ITS 通り」と連携	6.16 (木)	朝日 (朝刊)
4 国連大学、ユネスコ国際会議「地球と未来をささえる教育—グローバル化と持続可能な開発のための教育」28、29日豊田講堂で開催 宇宙飛行士の毛利衛さんら講演	6.16 (木) 6.29 (水)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊) 朝日 (朝刊)
5 訃報：日比野進・本学名誉教授	6.16 (木)	中日 (朝刊) 他2社
6 「井口先生が語る『老年学』」 井口昭久・医学系研究科教授が9月13日に、これからの老年医学の重要性と悩みつきない医者人生について語る	6.17 (金)	朝日 (朝刊)
7 未踏科学技術協会の超伝導科学技術研究会が「第9回超伝導科学技術賞」を選定 科学技術賞に田仲由喜夫・工学研究科助教授ら2名の「異方的超伝導体における界面現象の理論と実験検証」など	6.17 (金)	日刊工業
8 名古屋大学平和憲章の起草委員長を務めた故・小川修三・本学名誉教授を追悼する集いが18日豊田講堂で開催	6.17 (金)	朝日 (夕刊)
9 小澤智生・環境学研究科教授らのグループはマンモスの細胞から採取したミトコンドリア DNA の全解読に成功 マンモスはアジアゾウの系統と判明	6.18 (土) 6.19 (日)	朝日 (朝刊) 他4社
10 中部電力と「緊急地震速報」の共同研究に着手 気象庁の情報に本学独自の観測データを加え、精度を向上させたものを中部電力が供給区域内の取引先に速報を配信	6.18 (土)	中日 (朝刊)
11 「21世紀の産業基盤—循環型社会へのメッセージ」をテーマに「愛・地球会議」を6月2日に本学で開催 平野真一総長がパネル討論に参加し、「省エネへの啓発が重要」と話す	6.19 (日)	日経 (朝刊)
12 シンポジウム「いまの環境アセスメントで環境は守られるか」18日開催 島津康男・本学名誉教授はシデコプシ移植の可能性を視野に DNA 分析をした熱意などを評価し、閉幕後の撤去に関するアセスには「跡をどうするかの復元も対象にすべきだ」と話す	6.19 (日)	中日 (朝刊)
13 中部ペンクラブ創立20年記念全国同人雑誌会議開催 18日の討論会では堀内守・本学名誉教授が司会進行	6.19 (日)	読売
14 時のおもり：池内了・本学名誉教授 人間の幸福と技術革新	6.20 (月)	中日 (朝刊)
15 附属図書館の企画展「読書 (はなし) の書物—小林文庫本を中心に—」が7月8日まで開催 塩村耕・文学研究科教授は「解説と資料を見比べながら、その世界を存分に楽しんでほしい」と話す	6.21 (火)	中日 (朝刊)
16 冒険家・大場満郎さんとグリーンランドの内陸氷床約2500キロを縦断した長谷徹志さん・環境学研究科博士課程3年生 重さ110キロのソリを引きながら雪や大気中の物質を採取する環境調査を実施	6.21 (火)	中日 (朝刊)
17 学生街ダンス：尾関雄一朗さん・本学3年生 講演会めぐり、授業と違う新鮮さ	6.21 (火)	中日 (朝刊)
18 「大学から社会への情報発信」研究会23日開催 福井康雄・理学研究科教授の基調講演や全国主要国公私立大86校を対象に実施したアンケートの結果報告など	6.21 (火) 6.28 (火)	中日 (朝刊)
19 科学界、相次ぐ不正：浜口道成・医学系研究科教授は「日本の研究室は責任分散型。責任者の目が一番下まで届かない」と話す	6.21 (火)	朝日 (夕刊)
20 上坂裕之・工学研究科助手らが、複雑で立体的な形状に対応する高密度プラズマ表面処理技術を開発	6.22 (水)	日刊工業
21 名古屋市は7月7日に任期が切れる人事委員会委員・瀧川治男氏の後任に林光佑・本学理事を選任する方針を決める	6.22 (水)	中日 (朝刊)
22 叙位叙勲：正四位瑞宝中綬章 森川寿・本学名誉教授	6.22 (水)	中日 (朝刊) 読売
23 災害時の排泄ケアを考える講演会「排泄する『場!』を考えよう」7月16日開催 林能成・災害対策室助手、木村玲欧・同助手の講演など	6.22 (水) 7. 1 (金) 7. 8 (金)	読売 中日 (朝刊) 読売
24 国立大学は法人化後に特許出願数が急増したものの収入は減少 特許料収入全体の8割以上が赤崎勇・本学特別教授が約18年前に取得した青色発光ダイオード関連の特許によるもの	6.23 (木)	朝日 (朝刊)
25 芦荊基行・生物機能開発利用研究センター助教授、松岡信・同教授らのグループは理化学研究所などとの共同研究でイネの収量増加にかかわる遺伝子を世界で初めて特定し、収穫量の多いコシヒカリを作り出すことに成功	6.24 (金) 6.25 (土)	日刊工業 他6社
26 第11回「名古屋大学星の会」総会・講演会 26日開催	6.24 (金)	中日 (朝刊)
27 本学医学部、農業生物資源研究所、バイオベンチャー「プライムテック」の共同研究で体細胞クローン技術を用い、遺伝子組み換えのブタとヤギの生産に成功	6.25 (土) 6.27 (月)	朝日 (夕刊) 日刊工業
28 留学生は見た！おらがバビリオン：リチャード・ベリーさん・本学学生の見たオーストラリア館 じっくり見たいテレビ80台	6.25 (土)	毎日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
29 世界から：ガーナで一番有名な日本人は野口英世だと語るサミュエル・アジェイさん・本学研究員	6.25 (土)	読売
30 東海学生アメフトフェスタ最終日の26日 本学は61-28で福井大学に圧勝	6.25 (土) 6.27 (月)	中日スポーツ
31 レーザー：上坂裕之・工学研究科助手は学生だった10～15年前の関西と現在の名古屋を重ねる	6.27 (月)	日刊工業
32 ジュニアサイエンス教室「遺伝子を見てみよう」7月22日遺伝子実験施設で開催	6.27 (月)	中日(朝刊)
33 年代測定総合研究センター主催 体験学習「石がいつできたか調べよう！」7月25～27日の3日間開催	6.27 (月)	中日(朝刊)
34 自治体病院の医師不足・地域医療の空洞化進む：大磯ユタカ・医学系研究科教授「人事制度の整備急げ」、「近隣の病院で協力必要」と語る	6.28 (火)	朝日(朝刊)
35 UFJ総合研究所と連携して学内の研究・技術を企業向けに紹介する冊子を作成 先端技術共同研究センターでは、「産業界に大学の研究成果を理解してもらえるきっかけになれば」と話す	6.28 (火)	日経(朝刊)
36 レーザー：篠田剛・工学研究科教授は「アルミ合金を何度もリサイクルできる技術確立し、地球に優しい材料に」とリサイクル技術の進化を訴える	6.28 (火)	日刊工業
37 国際シンポジウム「アジアの環境法一法の整備から執行・遵守の確保へ」7月9日、10日シンポジウムで開催 森島昭夫・本学名誉教授らの基調講演など	6.28 (火) 7. 5 (火)	中日(朝刊)
38 東海財務局、名古屋証券取引所、愛知県内の金融機関などと本学で構成される「事業創生ネットワーク東海」が27日発足 投信や有価証券組合などを活用したリスクマネー供給の枠組みを協議	6.28 (火)	日経(朝刊)
39 医学部附属病院光学医療診療部は、新横浜メディカルクリニックと膵臓がん治療で共同研究を開始 2008年3月まで	6.28 (火)	中日(夕刊)
40 こども記者 万博を科学する：コミュニケーションロボット「DAGANE」を開発した西野隆典・情報メディア教育センター助手とビジネスデザイン研究所の加藤常徳さんは、「もっと自然な会話ができるようにするのがこれからの研究課題」と話す	6.29 (水)	朝日(朝刊)
41 国際言語文化研究科メディアプロフェッショナル論講座公開シンポジウム「国際報道はいまーあなたの知らないもう一つの『戦場』」30日開催 エドワード・ヘイグ・国際言語文化研究科助教授の講演など	6.29 (水) 7. 1 (金)	中日(朝刊)
42 29日に中国・上海市に本学では初めての海外事務所を11月に開設すると発表	6.30 (木) 7. 1 (金)	日経(朝刊) 日刊工業
43 2006年度の入試要項を発表 医学部を除く8学部の2次試験で課していた英語のヒアリングテストを廃止	7. 1 (金)	読売 他3社
44 備える：自主防災組織の実態 福和伸夫・環境学研究科教授は「自主防災組織の充実はいかに助け合う雰囲気作りがカギ」と指摘	7. 1 (金)	中日(朝刊)
45 国立大学図書館協会総会が30日本学で開催	7. 1 (金)	毎日(朝刊)
46 留学生は見た！おらがバビリオン：フリーダ・バリグマさん・本学学生の見たパプアニューギニア館 南太平洋諸国の個性示して	7. 2 (土)	毎日(朝刊)
47 毛利佳年雄・本学名誉教授と福島雅典・京都大学教授らは従来必須だったエネルギー伝達物質のアデノシン3リン酸がなくてもホタルなどの生体発光が起こることを発見	7. 4 (月)	日刊工業
48 澤田誠・環境医学研究所教授の研究成果を実用化する目的で設立されたバイオベンチャー企業ティッシュターゲティングジャパンは脳機能の検査に陽電子放射断層撮影装置を利用できるようにする新技術の実用化研究に着手 また、13日にNEDOの助成事業に採択	7. 5 (火) 7.14 (木)	日経(朝刊) 中日(朝刊)
49 京都大学、九州大学と連携して進める「物質合成研究拠点機関連携事業」の発足式が6月30日に野依記念物質科学研究館で開催	7. 5 (火)	中日(朝刊)
50 第25回COEオープンレクチャー「統合テキスト科学の構築」20日開催 高橋亨・文学研究科教授が「ハヤサスラヒメと物語テキストの水脈」と題して講演	7. 5 (火)	中日(朝刊)
51 生物機能開発利用研究センター公開実験講座2005「バイオサイエンス・バイオテクノロジーを体験する」8月6、7日に開催	7. 5 (火)	中日(朝刊)
52 ここに技あり：中日精工・近藤泰人さん 木方洋二・本学名誉教授と出会い、木質プラスチックの研究開発を開始 万博会場で使われている「千年時計」の歯車を製造	7. 5 (火)	日経(朝刊)
53 環境医学研究所主催の公開講座「アルツハイマー病 その病態と克服へ向けた試み」が8月21日にシンポジウムで開催	7. 5 (火)	中日(朝刊)
54 万博記念国際フォーラム8月7日豊田講堂で開催 宇宙飛行士のアレクサンダー・カレリさんや中村桂子・JT生命誌研究館長らが講演	7. 6 (水)	朝日(朝刊)
55 万博記念国際フォーラムのサテライトシンポジウムとしてアジアの環境変化と人類の活動を考える市民向け講座「氷河期から地球温暖化、そして未来は」を7月31日開催 小澤智生・環境学研究科教授の講演など	7. 6 (水)	朝日(朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
56 なごや東西南北ストーリー：男女共同参画室メンバー・東村博子・生命農学研究科助教授 「男女共同参画社会が実現すれば男性にとっても生活しやすくなる」	7. 6 (水)	毎日 (朝刊)
57 名古屋市は「名古屋の将来を語る懇談会」の委員13人を発表 座長に松尾稔・本学名誉教授、副座長に林良嗣・環境学研究科教授等	7. 6 (水)	中日 (朝刊)
58 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 高齢の肥満気味、長寿も	7. 7 (木)	朝日 (朝刊)
59 レーザー：芦苜基行・生物機能開発利用研究センター 助教授「決して遺伝子組み換えを否定していない」と話す	7. 7 (木)	日刊工業
60 理研の最前線：榊原均・植物科学研究センター生産制御研究チームリーダー 最近公表した2つの研究のうちの一つは本学の生物機能開発利用研究センターと共同で行ったイネ増収遺伝子の同定	7. 7 (木)	日刊工業
61 健康教育講座「閉経後を健やかに過ごす」8日開催 野村誠二・医学系研究科助教授が話す	7. 7 (木)	読売
62 LOOK & るっく：博物館特別展「時を測る—地球誕生から中世まで」では最新の研究成果や年代測定の方法を紹介	7. 7 (木)	日経 (夕刊)
63 医学部教授会が民間資金を活用して細胞の培養施設を学内に設ける計画を承認、10月にも稼働	7. 8 (金)	日経 (朝刊)
64 LED：90年代に日亜化学工業や赤崎勇・本学特別教授の研究成果を基にした豊田合成が相次いで青色LEDの製品化に成功、三原色がそろいあらゆる色を出せるように	7. 8 (金)	朝日 (朝刊)
65 ドライミスト：本学や東京理科大学の研究チームが開発した特殊なノズルで発生 愛・地球博の空中回廊「グローバル・ループ」のテントに設置	7. 8 (金)	朝日 (朝刊)
66 東海地方6月の地震：林能成・災害対策室助手	7. 8 (金)	読売
67 学生記者奮闘中：戸本早紀さん・本学3年生 ささまざまな水の展示「命の源」の意味を改めて実感	7. 8 (金)	読売
68 留学生は見た！おらがパビリオン：エルドルジョン・エルムロドフさん・本学学生の見たウズベキスタン「値切り」の練習をぜひここで	7. 9 (土)	毎日 (朝刊)
69 愛・地球博を陰で支える高度道路交通システム技術を紹介する「ITS EXPO」が11日から始まる 11日には森川高行・環境学研究科教授らによる「ITS EXPO シンポジウム」が本学で開催	7. 9 (土) 7.10 (日) 7.12 (火)	日経 (朝刊) 他3社
70 愛・地球博会場から「地球平和に向けた愛知アピール」を発信 主催の「地球平和フォーラム愛知」代表の加藤延夫・本学名誉教授は「報復の連鎖を断ち切りたい」と話す	7. 8 (金) 7.10 (日)	朝日 (夕刊) 朝日 (朝刊)
71 名古屋市と中大と共同で開発した、高齢者でも簡単に操作できるパソコンソフト「らくらくパソコンeーなもくん」8月から会員を募って講習会を開き、秋には運用を始める	7.12 (火)	朝日 (朝刊)
72 愛・地球博の開催にちなんで特別講義「博覧会と名古屋」を教育学部で開催 教育学部OBで名古屋市のパビリオン「大地の塔」館長の剣持一郎さんが講師	7.12 (火)	中日 (朝刊)
73 第10回高等研究院セミナー26日開催 鮎京正訓・法政国際教育協力研究センター教授、松原隆彦・理学研究科助教授が語る	7.12 (火)	中日 (朝刊)
74 ときめき時日記：深津将史さん・本学学生 勝利をめざし挑戦再び	7.12 (火)	中日 (朝刊)
75 法律家として実践的な授業「ロイヤリング」 本学の法科大学院では実際の事例を基に表現力のある劇団員を起用、より実践に近づける	7.13 (水)	読売
76 「なごや環境大学」のシンポジウム「環境時代と大学・地域・市民」21日名古屋能楽堂で開催 名古屋環境大学学長・松尾稔・本学名誉教授が話す	7.13 (水)	朝日 (朝刊)
77 7月29日から8月9日までの12日間、世界各地の提携校から学生代表を招待し、「第1回AC21学生世界フォーラム2005」開催	7.14 (木)	中日 (朝刊)
78 法学部出身の漫画家・木下小福さんが“名古屋のお嬢様”の生き方から幸せな結婚のセオリーを学ぶ法則本「名古屋嬢の謎～勝ち犬の法則36」を出版	7.14 (木)	読売
79 医学部附属病院歯科口腔外科は歯骨や皮膚の「再生医療」による試験的な治療を開始 上田実・医学系研究科教授らが設立した医療ベンチャー企業「アドバンスド・セル・テクノロジー」との産学連携でビジネス化も予定	7.14 (木)	中日 (夕刊)
80 ぜんそく死を減らそうと医学部附属病院を中心に「つるまい薬業連携協議会」を発足 医師と薬剤師の新たな連携で十分に患者指導ができない医師に代わり薬剤師が正しい服薬や自己管理の方法を教える試み	7.15 (金)	朝日 (朝刊)
81 教育学部附属中学・高校の校長に豊田ひさき・教育発達科学研究科教授を選出 任期は16日から2007年3月31日まで	7.15 (金)	中日 (朝刊) 他2社
82 「名古屋大学協力会」の設立総会が16日に野依記念学術交流館で開催 直江知樹・医学系研究科教授、石川孝司・工学研究科教授、福島和彦・生命農学研究科教授が講演	7.15 (金)	中日 (朝刊)
83 マイクロソフトが推進する「知的財産研究助成基金」の対象者に、鈴木将文・法学研究科教授ら10人を選定	7.15 (金)	日刊工業

卒業生向け広報誌「名古屋大学2005」を刊行

本学では新たな広報誌として「名古屋大学2005」（年1回発行）を刊行しました。

この広報誌は、卒業生や在学生の家族の方々に、本学の現在の姿や将来に向けた姿勢を伝えるために作成したもので、大学の広報誌として刊行されてきた「名古屋大学プロフィール本体編」、「名古屋大学プロフィール資料編」（各、年1回発行）、「名大トピックス」（月1回発行）などから記事をピックアップし、構成もコンパクトなものになっています。

本学では、既に卒業生・修了生等約7万人に対し郵送し、また、近々に在学生の家族約1万5000人にも郵送することとしています。学内で行われる行事や会議、同窓会、クラス会等の会合でも、「名古屋大学2005」を是非ご活用ください。

ご購入の方は、総務広報課広報掛（052-789-2016）までご連絡ください。



名古屋大学2005

名古屋大学教育紹介用 DVD を作成

本学では、このたび教育紹介用 DVD「名古屋大学 Digital Guide」を作成しました。

これまで、平成13年3月に作成した教育紹介用ビデオを部分的に改訂しながら使用してきましたが、法人化を経た現在では、内容が大きく変わっていることから、新たに教育紹介用 DVD を作成することにしました。この DVD は、大学説明会や大学見学等で使用するダイジェスト（約20分）の他に、歴史、学部・大学院、キャンパスツアー、データバンク等の個別コンテンツ、英語版からなり、対象者（受験生向け、一般向け、留学生向け）に合わせた推奨再生も可能です。

本学では、学外に PR するために、東海3県を中心に全国の高等学校等に郵送するとともに、本学のホームページでも公開する予定です。

なお、この DVD の詳細については、総務広報課広報掛（052-789-2016）までご連絡ください。



教育紹介用 DVD 「Digital Guide」

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

8月6日(土)～10月7日(金)

場 所：博物館
開館時間：10時～16時
休 館 日：8月6日・8月7日を除く
土・日曜日・祝日
入 場 料：無料

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

第6回名古屋大学博物館企画展

テ ー マ：核分裂絵巻



8月21日(日)

場 所：シンポジオンホール
時 間：13時30分～16時30分
定 員：200名
参 加 費：無料

[問い合わせ先]
環境医学研究所庶務掛 052-789-3886

環境医学研究所市民公開講座

「アルツハイマー病 その病態と克服へ向けた試み」



8月24日(月)

場 所：博物館講義室
時 間：15時～16時30分

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

第44回名古屋大学博物館特別講演会

講 師：外山茂樹名誉教授
演 題：『核分裂絵巻』構想の誕生まで (仮題)

8月25日(木)・26日(金)

場 所：野依記念学術交流館
[問い合わせ先]
附属図書館情報管理課庶務掛
052-789-3667

名古屋大学電子図書館国際会議 (IADLC : The International Advanced Digital Library Conference in Nagoya)

内 容：基調講演、講演・討論、ブース展示等

9月6日(火)

場 所：環境総合館レクチャーホール
時 間：17時30分～19時

[問い合わせ先]
災害対策室 052-788-6038

第12回名古屋大学防災アカデミー

講 師：吉川羊子医学系研究科助手
演 題：災害時の排泄問題

9月8日(木)

場 所：野依記念学術交流館カンファレンスホール
時 間：13時～

[問い合わせ先]
研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛
052-788-6051

第1回高等研究院スーパーレクチャー

招待講演

- 益川敏英京都産業大学教授
「真理へのアプローチ、媒介項は何か」
- 元高等研究院流動教員による講演・講演内容
 - I 岡田 猛教育発達科学研究科助教授
「芸術家の創造過程」
 - II 家森信善経済学研究科教授
「東海地域の金融システムの特徴と課題：名古屋の金利はなぜ低い？」
 - III 有本博一東北大学教授 (元理学研究科助教授)
「多剤耐性菌と闘う」
 - IV 楠見明弘京都大学教授 (元理学研究科教授)
「細胞中の1分子を見る、触る」
 - V 丹羽公雄理学研究科教授
「顕微鏡でニュートリノの種類を見分ける」

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

9月10日(土)～3月4日(土)

場 所：経済学部カンファレンスホール

時 間：10時～12時

対 象：中学生・高校生とその保護者、
教育関係者、社会人

回 数：10回

[問い合わせ先]

大学院経済学研究科エクステンション・
サービス

052-788-6197

オープン・カレッジ 自由奔放！サイエンス

<http://www-oc.soec.nagoya-u.ac.jp/>



9月17日(土)

場 所：大学院生命農学研究科附属農場
内農業館

時 間：14時～16時

定 員：60名

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

大学院生命農学研究科附属農場事務掛

0561-37-0210

地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」講演会

講 演 者：山田容三生命農学研究科助教授

演 題：健康と森林浴

9月27日(火)

場 所：高等総合研究館カンファレンスホール

時 間：17時～

[問い合わせ先]

研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛

052-788-6051

第11回高等研究院セミナー

講演者Ⅰ：芝井 広理学研究科教授（高等研究院流動教員）

「遠赤外線で迫る宇宙諸天体の誕生現象」（仮題）

講演者Ⅱ：八島栄次工学研究科教授（高等研究院流動教員）

「超構造らせん」（仮題）

10月31日(月)～11月2日(水)

場 所：野依記念学術交流館会議室

時 間：9時～18時（10月31日・11月1日）

9時～15時30分（11月2日）

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

松本哲男農学国際教育協力研究センター
教授

052-789-4240

農学国際協力日米大学連携セミナー

テ ー マ：農学国際協力における日米大学の連携をめざして

Approach to collaboration between the Universities in Japan and the
United States in International Agricultural Cooperation

内 容：発展途上国の農学分野の国際協力に携わる日米の大学・研究機関と、援助
機関の専門家が、それぞれのこれまでの取り組み事例を発表し、経験を交
換する。日米それぞれ10大学程度と3機関、省庁の関係者、およそ30名
が公開で途上国の状況に応じた大学のより効果的な取り組み方について議
論し、アジア、アフリカにおける両国の協力・連携の可能性について対話
を行なう。

お詫びと訂正

名大トピックス No.146 (平成17年7月15日発行)

6ページの『岡本佳男名誉教授が藤原賞を受賞』に誤りがありました。「本学では、赤崎 勇特別教授に続いて2人目の受賞となります。」を「本学では、平田義正理学部教授、伏見康治名誉教授、大澤文夫理学部教授、赤崎 勇名誉教授(職名はいずれも受賞当時)に続いて5人目の受賞となります。」と訂正させていただきます。慎んでお詫びします。

名大トピックス No.147 平成17年8月15日発行

編集・発行/名古屋大学広報委員会

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL. 052-789-2016 FAX. 052-789-2019 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

中央図書館屋上から望む豊田講堂(平成17年7月15日撮影)



40 青色発光ダイオードと豊田講堂時計台

現在、本学東山キャンパスのランドマークである豊田講堂は、夜間のライトアップが行われ、時計台にも鮮やかな青色のイルミネーションが施されています（写真1）。今回は、その時計台のイルミネーションについて紹介します。

本連載第8回（No.115）で取り上げたように、豊田講堂は1960（昭和35）年に完成しました。当時、豊田講堂時計台（直流式塔時計・文字盤直径2m）はライトアップやイルミネーションなども全く施されておらず、昼間しか時計をみることはできませんでした（写真2）。

では、時計台にイルミネーションが施されるようになったのはいつ頃であるかという、それは1994（平成6）年度のことです。ただし、その当時のイルミネーションは、文字盤および時計針・分針に赤色の発光ダイオード（LED）が組み込まれたものでした（写真3）。その後、現在のような青色LEDへと変更されたのは2001年11月のことで、豊田合成株式会社からの寄付によるものでした。

特筆すべきは、現在の時計台に組み込まれている青色LEDは、本学の赤崎勇特別教授が工学部に在職中の1989年に発明・開発したもので、豊田合成株によって実用化されたものです。豊田講堂ロビー西側入口手前の壁面には、「豊田講堂時計台に用いられている青色発光ダイオードは、本学 赤崎 勇 名誉教授が工学部在職中に開発されたものであり、豊田合成株式会社の寄付により完成したものである。」と記された記念プレートが設置されています。

なお、当時不可能とされていた「青」色発光の半導体開発を世界に先駆けて実現した研究業績は半導体研究に革命をもたらしたともいわれ、赤崎特別教授は2004年度の文化功労者として顕彰されています。また、本学では、2000年度から本学に還元されるようになった青色LEDの国有特許実施料を活用して、赤崎記念研究事業（特定研究推進、研究奨励、産学連携推進の3事業）を行っています。



1	2	3
	4	5

- 1 青色LEDが輝く豊田講堂時計台
- 2 完成当初の時計台
- 3 赤色LED当時の時計台
- 4 世界初のGaN-p-n接合型青色LED（1989年）発光させている1つのLEDの光がウェハー内を透過し、周縁で反射している。（名大トピックス No.138より転載）
- 5 赤崎記念研究館模型

